就職率100%の先を見据え、“働く”を自分事化する進路指導で入社後のミスマッチを防ぐ

鹿児島工業高校（鹿児島・県立）

取材・文／笹原風花

中小より大企業の方がいい？安易な選択が悲劇を招く

「17、18歳の生徒にとって、数ある仕事の中から一つを選ぶのは易しいことではない」。そう語るのは、進路指導部主任の山下澄雄先生。特に注意が必要なのが、大手企業に就職するケースだという。

「大手企業の場合は、例えば自分は車のこの部品を作りたいと思って入社しても、他のものを作る部署に配属されたり、異動になったりすることがあります。大手であればあるだけ本当にやりたい仕事ができない可能性もあるのだと生徒に理解させることに、困難さを感じます」

このような大手企業への就職のメリット・デメリットや企業の所在地域などを含め、どういう企業・仕事なのかという理解が深まらないまま、また自分が働くイメージがもてないまま安易に就職先を選んでしまうと、ミスマッチが起きかねない。これを防ぐために同校では、1年次からさまざまな経験を通して仕事の実情や働く現場を知る機会を設けている。

現場を見て先輩の話を聞き、応募前に訪れて最終確認する

1年次に行われる特色ある進路行事には、「産業現場見学会」と「先輩の話を聞く会」がある。同校では、1年次は2つの類（工業Ⅰ類・工業Ⅱ類）に緩やかに分かれて幅広く学び、2・3年次はさらに7つの系（工業Ⅰ類：電子機械系・電気技術系・情報技術系・工業化学系、工業Ⅱ類：建築系・建設技術系・インテリア系）に分かれて専門的な知識・技術を身につける類系システムをとっている。生徒一人ひとりの希望と適性に基づいて系を選択できるよう、1年生全員を対象に行われるのが「産業現場見学会」だ。鹿児島市内にあるメガソーラー施設や住宅展示場、指宿市にある地熱発電所など、各系に関係する産業現場を見学する。各分野の学びの先にある実際の仕事を、肌で感じてもらうのが目的だ。また、「先輩の話を聞く会」では、生徒が自分を投影できるよう、生徒と年齢の近い就職して年数の浅い卒業生を招き、良いこともそうでないことも本音で体験談を語ってもらう。

進路指導部主任
山下澄雄先生

進路指導の課題とテーマ

1908年に創立され、110年を超える歴史をもつ伝統校。地元では「鹿工」の愛称で親しまれ、同窓会の結束も強い。また、全国大会に出場するなど部活動も盛んで、文武両道の校風を受け継いできた。校訓は「精進・創造・誠実」。特に「創造」には、「工業人として未来に向かって創造する」という思いが込められている。例年、1学年の約8割が就職、約2割が進学という進路希望状況で、公務員志望者も増えている。就職希望者に関しては、18年連続で就職率100%を達成。うち、9割を超える生徒が第一志望に内定を決めており、就職先も県内や九州地方にとどまらず全国各地に広がっている。求人数は年々増えており、2019年度は過去21年間で最高の件数だった。

求人は多く業種・職種も多様で、就職を希望する生徒にとっては恵まれた環境であるものの、売り手市場だからこその課題もある。業務内容や企業風土への理解が浅いまま給与や福利厚生面で選ぶ、友人が希望するからという理由で志望するなどの安易な選択をした結果、就職後にミスマッチが起こるケースが出ているのだ。こうした課題を解決するために、同校では「さまざまな経験を通して仕事や働く現場を知ること」に重点を置いた進路指導を実践。3年間を通したキャリア教育を行い、自分が何をしたいのかを深め、実際に社会で働くイメージを描いたうえで、自分に合った就職先を選択できるよう指導している。

進路状況（2019年3月実績）

大学25人、短大7人（高専編入含む）
専門学校など35人、就職284人

就職の内訳は、県内企業70人、県外企業197人、公務員16人、自己就職1人。業種別では製造業・鉱業が約半数を占め、建設業が続く。

School Data

1908年創立／工業Ⅰ類（電子機械系・電気技術系・情報技術系・工業化学系）、工業Ⅱ類（建築系・建設技術系・インテリア系）／生徒数1066人（男子919人・女子147人）

系に分かれて専門的に学ぶ2年次には、希望進路にかかわらず全員が参加する3日間のインターンシップや先輩の話を聞く会の他、県内で会社を経営する同窓会員との座談会や県主催の県内企業説明会を校内で実施するなど、就職に向けて意識を高めていく。3年次には、7月1日からの求人票の受付開始に先立ち、どこで働きたいか、どういった仕事がしたいかを詰めていく。さらに、先輩たちが書き残した「受験報告書」などを参考にしながら、企業を絞り込んでいく。そして、就職試験前には各社が実施している「応募前職場見学会」への参加を促し、ミスマッチがないかを本人に最終確認させている。

「応募前職場見学会は、特に遠方の企業の場合は生徒や保護者にとっても送り出す私たちにとっても負担にはなるのですが、会社や職場の雰囲気は実際に足を運んでみなければわからないので、ミスマッチを防ぐためにもできるだけ行くよう推奨しています。現状では就職希望者の7～8割が参加し、なかには保護者も一緒に参加するケースもあります。求人票だけで仕事や職場を決めるよりも、生徒自身の中に働くのだという実感が湧くように感じます」

1年次に生徒の特性を把握し、苦手は時間をかけて克服する

仕事内容や働く現場を知る機会を与えることに加え、SPIや一般常識の試験対策を行う朝学習や公務員試験対策なども実施。また、高卒の採用試験では面接が非常に重視されるため、面接や近年増えているグループディスカッションの指導は徹底的に行っている（ツール1）。夏休み期間には5回ほど勉強会を開催。昨年は30名近い生徒が参加した。

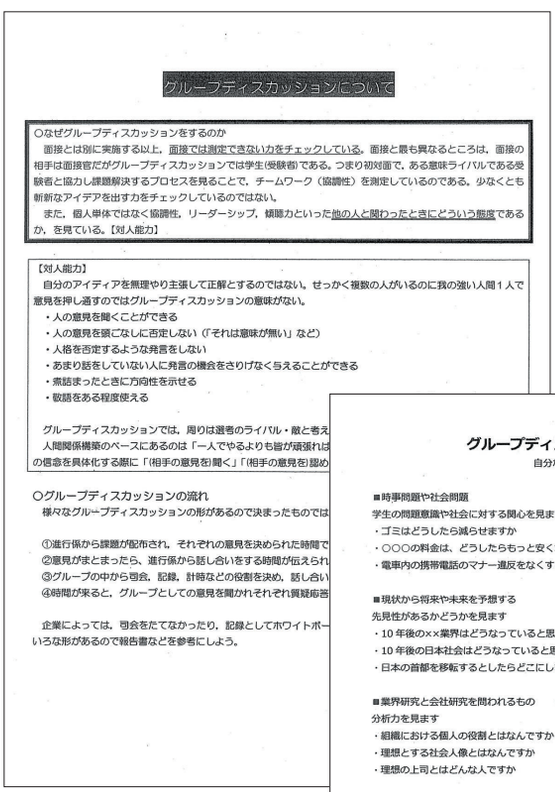
「先輩の話を聞く会」は、1・2年生を対象に毎年3学期に開催。高校時代の取組や就職活動の苦労話から現在の仕事内容や社会人としての生活まで、卒業生がざっくばらんに語る。

1年次3学期に行われる「産業現場見学会」では、各系に関係する現場を見学に行く。そのほかにも鹿児島中央駅前に建設中の高層ビルの現場を見学させてもらう（建築系）など、自分の目で見て確かめられる機会が多くある。

ツール1

グループディスカッションのワークシート

ダウンロード可



グループディスカッションについて

○なぜグループディスカッションをするのか
面接とは別に実施する以上，面接では測定できない力をチェックしている。面接と最も異なるところは，面接の相手は面接官だがグループディスカッションでは学生（受験者）である。つまり初対面で，ある意味ライバルである受験者と協力し課題解決するプロセスを見ることで，チームワーク（協調性）を測定しているのである。少なくとも斬新なアイデアを出す力をチェックしているのではない。
また，個人単体ではなく協調性，リーダーシップ，傾聴力といった他の人と関わったときにどういう態度であるか，を見ている。【対人能力】

【対人能力】
自分のアイディアを無理やり主張して正解とするのではない。せっかく複数の人がいるのに我の強い人間1人で意見を押し通すのではグループディスカッションの意味がない。
・人の意見を聞くことができる
・人の意見を頭ごなしに否定しない（「それは意味が無い」など）
・人格を否定するような発言をしない
・あまり話をしていない人に発言の機会をさりげなく与えることができる
・煮詰まったときに方向性を示せる
・敬語をある程度使える

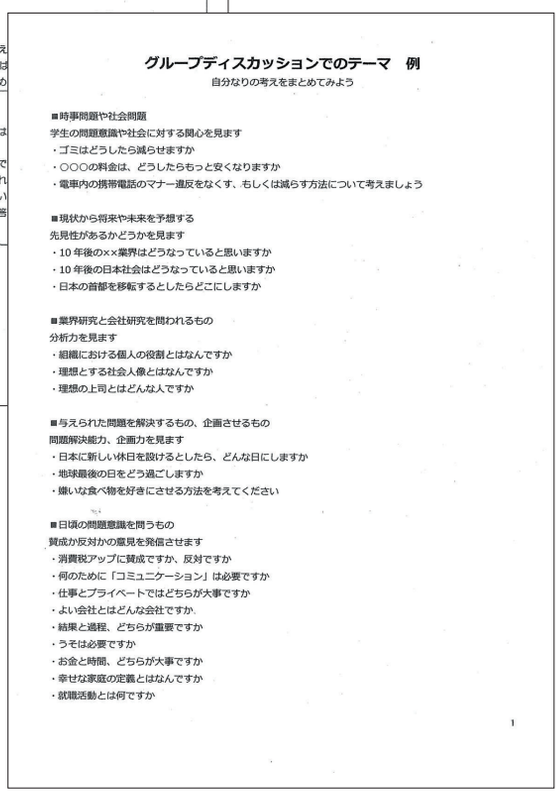
グループディスカッションでは，周りは選考のライバル・敵と考え
人間関係構築のベースにあるのは「一人でやるよりも皆が頑張れば
の信念を具体化する際に「（相手の意見を）聞く」「（相手の意見を）認め

○グループディスカッションの流れ
様々なグループディスカッションの形があるので決まったものでは

①進行係から課題が配布され，それぞれの意見を決められた時間で
②意見がまとまったら，進行係から話し合いをする時間が伝えられ
③グループの中から司会，記録，計時などの役割を決め，話し合い
④時間が来ると，グループとしての意見を聞かれそれぞれ質疑応答

企業によっては，司会をたてなかったり，記録としてホワイトボー
いろな形があるので報告書などを参考にしよう。

「なぜグループディスカッションをするのか」という目的や評価ポイントからグループディスカッションの流れ、準備（対策）、チームワークを発揮するためのポイントなどまで、実践的なアドバイスも含めてコンパクトにまとめられている。



グループディスカッションでのテーマ　例
自分なりの考えをまとめてみよう

■時事問題や社会問題
学生の問題意識や社会に対する関心を見ます
・ゴミはどうしたら減らせますか
・○○○の料金は、どうしたらもっと安くなりますか
・電車内の携帯電話のマナー違反をなくす、もしくは減らす方法について考えましょう

■現状から将来や未来を予想する
先見性があるかどうかを見ます
・10年後の××業界はどうなっていると思いますか
・10年後の日本社会はどうなっていると思いますか
・日本の首都を移転するとしたらどこにしますか

■業界研究と会社研究を問われるもの
分析力を見ます
・組織における個人の役割とはなんですか
・理想とする社会人像とはなんですか
・理想の上司とはどんな人ですか

■与えられた問題を解決するもの、企画させるもの
問題解決能力、企画力を見ます
・日本に新しい休日を設けるとしたら、どんな日にしますか
・地球最後の日をどう過ごしますか
・嫌いな食べ物を好きにさせる方法を考えてください

■日頃の問題意識を問うもの
賛成か反対かの意見を発信させます
・消費税アップに賛成ですか、反対ですか
・何のために「コミュニケーション」は必要ですか
・仕事とプライベートではどちらが大事ですか
・よい会社とはどんな会社ですか
・結果と過程、どちらが重要ですか
・うそは必要ですか
・お金と時間、どちらが大事ですか
・幸せな家庭の定義とはなんですか
・就職活動とは何ですか

7つのテーマ別に、グループディスカッションの頻出テーマをまとめた資料。勉強会では、「答えを出すことがゴールではなく、自分なりの考えをまとめ、発信し、仲間と協働して議論を進める力が試される」ことを生徒に伝えているという。

ダウンロード可　※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 発行メディアのご紹介 >> キャリアガイダンス（Vol.431）

こうした進路指導が功を奏し、例年、ほとんど（95％前後）の生徒が第1志望の企業に合格する。その一方で、学年に数名は不合格になってしまう生徒もいる。そんなとき山下先生は、企業の採用担当者に「どこがダメだったか」を可能な限りヒアリングしているという。

「落ちてしまう生徒に共通しているのが、自分のことを表現することが苦手な、いわゆるおとなしい生徒です。あらかじめ準備した志望動機は語れても、少し突っ込んだ質問をされると答えられなかったり、質問とはちぐはぐな答えを返してしまったりする。面接で試される対話力などの人間性は、にわか仕込みでは通用しません。不得手なことや性質は、1年次から時間をかけて少しずつ克服していく必要があるのです」

生徒の性格や傾向を知るため、同校では適性検査の一つ「クレペリン検査」を1年次の1学期に全員に受験させている。

校内で開催される鹿児島県商工労働水産部主催の「工業系高校生のための県内企業説明会」には40社余りが出展。2年生とその保護者が対象で、就職希望者の多くが参加する。

クレペリン検査の結果次第で不合格になる企業もあり、その対策の意味合いもあるが、最大の目的は生徒の苦手なことやネガティブな傾向を発見することだ。

「例えばクレペリン検査で怠慢な傾向が見えてきた生徒には、毎日コツコツと続ける必要のある役割を与えるなどして、就職試験に不利になる要素を克服できるよう日常からサポートしている」と山下先生は言う。

手帳を使ってPDCAを回し、自己管理力を身につける

同校では進学指導にも力を入れており、就職指導と同様、進学先とのミスマッチ防止に努めている。自分は何に興味・関心があるのか、入学後に何がしたいのか、進学先の学校を卒業した後にどのようなかたちで社会に貢献したいのかなどについて、「生徒と教員とが納得いくまで問答を繰り返し、進学先への志望理由を掘り下げている」という。AO入試や推薦入試での受験が中心で、2019年度は早くも進学希望者82名中71名が合格を決めている（2019年12月10日時点）。また、近年では国立大学をはじめ4年制大学への進学者も増えている。

今後、大学入試においてポートフォリオの必要性が高まることを受け、同校では昨年度からスケジュール手帳の活用を始めた。現在は1年生と2年生に配布し、日々の学習や活動の計画・記録を記させている。学校行事などへの取組や取得した資格についての記録を書き残し、振り返ることで内省を促す。ポートフォリオ作成時や採用面接対策時に役立てることに加え、手帳を使ってPDCAサイクルを回すことで自己管理力を身につけることも導入目的の一つだ。

「ものの開発やものづくりには、自分で考え行動して振り返り、改善していく力が不可欠です。そうした力を身につけた技術者、社会人になってほしいという思いから、就職希望者も含めて全員で取り組んでいます。生徒にアンケートをとったところ、忘れ物が減った、学校行事に向けて計画的に準備ができるようになったという声が多数ありました。来年度からは全学年が使うことになるので、手帳活用の強化週間を設けるなど学校全体で注力していきたいと考えています」

ミスマッチが起こらないよう配慮しながら、生徒の主体的な進路選択を支えてきた鹿児島工業高校。同校が進路指導のモットーとして掲げる「夢実現」の実践が、高い就職率、合格率につながっている。

週ごとの目標とto doを書き出し、毎日いつ・何をやったかと1日の振り返りを記入。さらに、「起床・勉強開始・就寝」の時刻を記録することで、生活リズムも管理できる。

成果と課題

現場を知る機会を拡充し、生徒の意識向上を図る

仕事や職場について実際に見聞きする機会が多くあることで、「生徒たちは仕事というものをより身近に感じ、自分事として現実味をもって捉えられるようになってきている」と、山下先生は変化を感じている。一方で、「そうではない生徒がまだ存在するのも事実。今後もミスマッチをなくす取組を継続していく必要がある」と言う。そのための具体策として山下先生は、「同窓会のネットワークなどを活かし、県内で生徒が訪れられる産業現場をさらに増やしていきたい。また、卒業生がよく学校に顔を出してくれるので、生徒と引き合わせるなど接点をもたせて話を聞く機会をより増やしていきたい」と述べる。今後は手帳やキャリア・パスポートの活用を進め、大学入試改革も視野に入れつつ、進路指導をさらにブラッシュアップしていく予定だ。